

マールブルクの街と大学

樋浦 明夫

徳島大学歯学部口腔解剖学教室

田原淳が100年前に留学した時とほぼ同じたたずまいを残している現在のマールブルクの街と大学の一部を写真で紹介します。

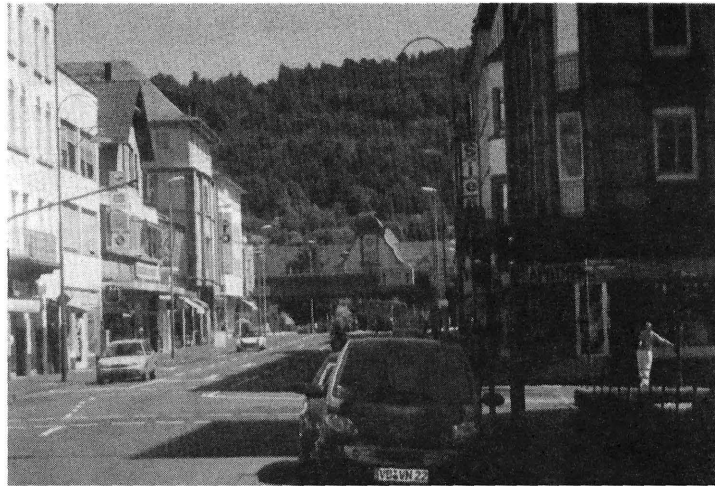


写真1. 正面に見えるのがマールブルク駅 (Haupt Bahnhof Marburg)。小ぢんまりした駅舎だが、中には切符売り場とインフォメーション、パン屋、売店、本屋がある。駅から左折するとロベルトコッホ通り (写真の右側) で、すぐに細胞生物学・解剖学研究所、田原が留学した旧病理学研究所などのマールブルク大学医学部の基礎系の研究所や病院がある。駅前通りを真直ぐに行って、ラン川を渡り左折すると二つの尖塔のゴシック様式なエリザベート教会が見えるエリザベート通りに至る。1850-52年にカッセル、マールブルク、フランクフルト間に鉄道が敷設された。



写真2. ロベルトコッホ通りに面した細胞生物学・解剖学研究所 (左) と旧病理学研究所 (右)。二つは隣接しているが、全く別な研究所。どちらも田原が留学していた頃とほぼ同じ建物であることに驚嘆する。ロベルトコッホ通りを進み、ラン川を渡ると1839-51年にマールブルク大の教授だったブンゼンバーナで有名な化学者 R.W. ブンゼンを記念したブンゼン通りに至る。その他、ハイネ通りやベーリング通りなど世界的に著名な人の名前を冠した道路の多いのがマールブルクの特徴。



写真3. 旧病理学研究所の階段の壁面に飾られている吉野順夫画伯が描いた“田原淳とL. Aschoff プラス須磨幸蔵”の絵。D. リベラの“心臓病学の発展に寄与した医学者の群像”と違って、正面を向いた田原が描かれている。

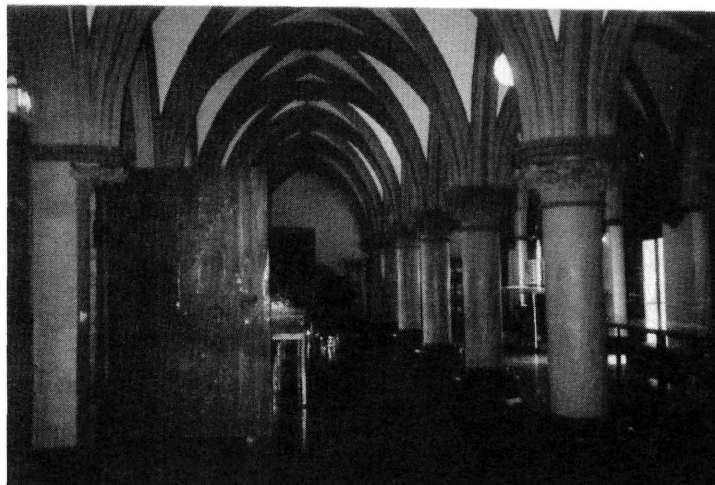


写真4. 古い大学 (Alte Universität) の入り口を入ったロビー。重々しい木の扉が中世を思わせる。1527年に11人の教授と84人の学生でマールブルク大学は始まった。一部が大学教会になっているこの古い建物は現在も研究室や講義室として使われている。筆者が滞在した2003年6月に大学附属の日本研究センターの125周年記念がこの建物の大講堂で行われた。その休憩の簡単な立食パーティーにこのロビーが使われた。



写真5. マルクト広場を経てシュロス（方伯城）に続く石畳の坂道。右上の本屋の看板に "Universitäts Buchhandlung" とあり、マールブルクが大学町であることが分かる。